

京都市生涯学習市民フォーラム 平成22年度 シンポジウム

- 日 時 平成22年12月19日（日） 午後2時30分～4時
- 場 所 京都産業会館8階「シルクホール」
- テーマ 京の学びで明日を創る～「学術都市・京都」の未来像～
- パネリスト

- ・堀場 雅夫氏（京都市生涯学習市民フォーラム会長／株式会社堀場製作所最高顧問）
- ・松本 紘 氏（京都大学総長）
- ・門川 大作氏（京都市長）

（堀場会長）

本日の司会役をつとめさせていただきます。「京の学びで明日を創る」というテーマでお話をいただきたいと思います。

京都はよく「学術のまち」とか「大学のまち」と言われ、人口の10%近くが学生で「学生なくして京都なし」「大学なくして京都なし」と言われるほど学生が多い。私が残念に思っているのは、その学生が大学生活を終えると、東京などに行ってしまう者が多いことです。我々産業界の人間としては、できるだけ京都で学んだ人が京都に定着していただくことが、京都のまちの発展、日本のまちの発展につながると考えて努力しています。学生からすると、京都に魅力的な産業がたくさんないと思われるかもしれませんが、我々も頑張りますので、どうか京大もできるだけ京都の良さを教えていただいて、なるべく京都のまちに優秀な学生が定着してほしいと思っています。

（松本総長）

堀場会長から「京都で学んだ学生が京都に定着してほしい」という話がございました。そのとおりだと思っております。ただ、京都は第二次大戦のとき爆撃されませんでした。それは市民に立派な方がたくさんおられたということはもちろんありますが、基本的には京都のまちの良さを世界の人、特にアメリカ人やヨーロッパ人が知っていたから爆撃されなかったと思うんです。そういう意味では、京都で学んだ人たちが日本のいろんなところで活動することは、京都にとっても、京都の産業にとっても非常に良いことだと思います。だから、重要なことは居つくということより、「新しい風は京都から」という言葉があるように京都で学んでいる間に、京都の産業は非常に新しい先端技術を持っている一方で伝統産業もきちんとあるので、その実態や優秀さ、現場を見てもらうことが重要だと思います。京の学びで「明日」を創る、「明日の京都」を創る、「明日の日本」を創る、そしてできれば「明日の世界」を創るとなってもらいたいと考えています。

（堀場会長）

市長は、学術都市という特性を活かした京都のまちづくりを以前からおっしゃっているわけですが、その点についてお話をいただけたらと思います。

（門川市長）

京都には素晴らしい多くの都市の特性、“ものづくり、宗教、文化芸術、歴史的な伝統”などがあり

ます。それらの全てが大学との関わり抜きにはなく、大学のまち・学問のまち京都、同時に人づくり・人が育つまち京都、これが都市の根底であると言っても過言ではないと思います。京都のあらゆる強みを生かし、きちんと融合して、人を育て京都を元気にし、全国、世界を元気にしていくという大きな仕組みが大学である。だから、大学のまちの要素を徹底して活用しきることが大事だと思います。

ただ、京都は素晴らしい都市の条件があるけれど、若い人が働く企業が少ない。就職は他の都市に行かないといけないという要素があります。司会をしていただいている辰巳さんの通う京都女子大学は、今年百周年です。でも京都女子大学で学ぶ学生は、9割が全国から来られる。そして見事に京都で学んでいる間に京都の女性、京女になって全国に羽ばたいていかれる。こういうのも良いと思うんですけど、もう少し京都に定着してほしい。大企業ばかりでなくて、魅力や可能性のある京都の中小・零細企業に就職してもらって、まちを元気にしていく、そんな仕組みも作っていかうとしています。

(松本総長)

京都大学では、市と府と一緒にあって、新しい産業技術を身に付けた人を世の中に出しましょうということをやっております。「元気な日本」と政府は言っています。しかし、先端的な技術を社会人が身につける機会はそう多くありません。そこで京都大学では、研究室でそういう技術を身につけたい方を募集し、今まで100人近い方が京都大学に来られました。うち80人は、非常に高度な最先端の機械が自由に操れるところまで研修をしていただいています。

最初は、市や府によるセミナーでマインドを整えていただいて、その後に研究室に来ていただきます。基本的な授業と一緒に、非常に高度な、例えばナノテクのハイテクの機械を自分で使って動かしてみるという研修をほぼ1年やります。すると、就職率が非常に良いですね。再就職なさる方もありますし、元の企業に戻られる方もあろうかと思いますが、今まで80人くらいが京都地域を中心に就職されました。

(門川市長)

松本総長の提案ですね。

(松本総長)

全国でたぶん最初だと思いますね。

(堀場会長)

先生は大学の教員ですか？

(松本総長)

もちろん大学の研究室の教員が指導しています。関係する授業も受けていただいて、例えばナノテクですと非常に高度な機械の動かし方はいきなり無理なので、実習をしていただくということをやっています。

(堀場会長)

総長が変わったら急にそうした取組が進むものですか？

(松本総長)

そんなことはないと思いますが、大学は京都の地域からずいぶんサポートを受けております。京大の場合ですと、日本が相手、世界が相手という面もありますが、地域の中に学生が溶け込み、地域の中で教員が生活することが重要と考えていますので、新しい仕組みの大学院を作ろうと思っております。その場合、京大はキャンパスが小さいので、市長にお願いして空いた学校の跡地を利用させていただくというような工夫をしないといけないと思っています。

(堀場会長)

桂に工学部があれだけ広い土地を用意していただいて大変良かったのですが、一時は滋賀県に取られる状態でした。京都にあるから京大であって、絶対あかんと思います。欧米の大学のように、町中に学部がいっぱいあって、シャトルバスが走っていて、というようなことが京大でもできませんか？

(松本総長)

ヨーロッパの大学は、まちの中に建物が分散していて、まち全体にキャンパスが広がっているという感じなんです。アメリカのスタンフォード大学なんかは、門を入ってから建物に行くまで1 km以上ある非常に広大なキャンパスを持っています。それに比べ京大は狭いです。まちなかに出て行くのはいいと思っていますが、大型の研究設備や化学薬品を扱うという問題があるので、ある程度は大型あるいは高度な研究は固まっていけないと思っています。

(門川市長)

日本で初めての取組が今行われています。大学卒業あるいはドクターになっても就職がないという人、民間企業で失業した人を、大学と企業と行政が一緒になって即戦力の人材に育てていく。そして、京都の中小・零細企業に就職させていこうという発想で企画された事業が今実現しているんです。京都はそういうことができるまちなんです。

(堀場会長)

産学連携は技術だけでなく、人材養成が最高のことと思うんです。大学を出られた方が、会社へ入ってすぐその日から働けるとは思いませんが、基礎的な社会の仕組みとかものの考え方、将来たくさんの部下を使ったときのリーダーシップの取り方を大学で一味違う形で教育するというふうにならないといけない。単に一つの技術だけを知っているからというのでは、その人の人生もかわいそうですから、そういう教育もぜひお願いしたいと思っています。

(松本総長)

私が堀場さんの会社を最初に訪れたとき、「京大はもっと哲学やるべきだ」といきなりガツンと言われました。私は電子工学科を出ていますが、仕事は宇宙科学をやってきました。サイエンスとエンジニアリングの両方の知識があるんですが、心の奥底には文化系の勉強をしたいとずっと思っていました。哲学という言葉聞きまさそうだと思います。

今の大学は、入学されて学部で社会に出られる方がおられます。それから、京大の場合ですと約60%が大学院に行き、研究室に入り、研究室の先生の仕事に近いところで何か研究を始めます。2年でマスターして、また社会に出る人がいます。そして、そのままドクターに行く人がいます。どんど

ん専門の細い分野に入っていきます。木で言うと、大きな幹のところでは大学に入って、枝に分かれて文化系・理科系・医学系と分かれて、さらに小枝に分かれ、大学院に行くとも小枝の先の小さな本当に細い枝の先までのぼりつめる。そこで、さらに枝をのぼすべく、本当に世界で一番ホットな研究を進めるんです。ですから、どんどん深くなるかわりに狭くなっていきます。これで良いのかという話を先ほど堀場さんもなさったと思います。堀場さんは、京大の物理の出身で先輩としていろいろ心痛めてアドバイスして下さいますので、私も考えて新しい大学院を創ろうと思いました。

今までの大学院は研究が表に出ているとどんどん細い分野に入って研究の最先端を掘り起こしていくということをやっています。それだけで良いのかという疑問は、今の産業界から強く出ています。つまり、そういう方が就職したら、自分の専門をさせたらものすごく強いけれど、それ以外のことになると学部時代に習ったことが少し役立つぐらいで、大学院の教育がそのまま生かせないということがよくあります。だからドクターコースを出たけど、就職はそれ以外のところでしにくい。産業界もあまり取らない。せっかく優秀で頭良くて頑張ってきた子が就職できないということが、起こってしまっているんです。

それで、発想を変えて逆さまにしようと思っています。大学院に行ったらまず2年ほど頑張つて研究だけをやってもらいます。2年して学術論文ができれば、情報の集め方、処理の仕方、考え方が身につきます。それは最低限、博士号を持つためには必要だと思っています。それから、文学・芸術、政治・経済、医学、理学、工学など、あらゆる学問を10科目ほど単位を取らなければ、上に行けないという仕組みを導入したいと思っています。4年目には海外へ出て、海外の大学あるいは国際機関で1年間留学する。1年間、外国で勉強することが大変重要だと思っています。帰ってきて、産業界でインターンとか官界とか国際機関とかを自分で選んで、考えて行動してもらおう。そういう新しい全く違う大学院を創ろうと思っています。

(堀場会長)

それは素晴らしいことですね。私の生きている間に、第一号の卒業生の顔が見たいと思います。

(松本総長)

全寮制にしたいんです。最近の子は体力も劣っていて、ポンと押せばこけるような子がいっぱいいるんですね。私と腕相撲して勝てないんです。ですから、ヨーロッパの大学のようにカレッジでスポーツに励んでいただくことも必要と思うので、寮対抗戦をやりたいんです。京都の三大祭りのうち時代祭は比較的新しく、明治時代は三大祭の一つではなかった。旧制第三高校の運動会やったんです。当時1万人が集まり、体育が盛んだったんです。心技体そろそろような教育も必要かと思います。

(堀場会長)

寮はすごくいいと思います。この頃、草食男子とか言われるが、肉も食べて、元気を出さないと。もう少し日本全体が活性化するにはどういう手だてがあるのでしょうか？

(松本総長)

先ほど若い子たちが踊っているのを舞台袖から見ましたが、力があるし元気もあると思いました。そういう力をのびのび伸ばしてやるということを地道に積み上げることじゃないですかね。

(門川市長)

学生祭典は素晴らしい京都ならではの祭典です。それを京都の4大祭りにしようということで頑張っていると思います。大学の枠を超えて学生がつながっている。経済界とも地域ともつながっている。また、京大などでも地域貢献を強く打ち出してもらっています。同時に、50の大学で大学コンソーシアムができて、キャンパスプラザを中心に500を超える単位互換性が実施されている。あるいは企業の協力を得てインターンシップをやったり、大学の最先端の知識・知恵を市民に提供する「京カレッジ」という生涯学習講座をやっている。単位互換性で面白いと思うのは、人気がある講座の一つが花園大学の「禅と日本文化」に関する講座なんですね。150人の定員のうち約半分が留学生。京都大学などで学ぶ留学生が、単位互換制で花園大学の「禅と日本文化」の講座を受けている。このように京都のまちで学ぶ、京都から学ぶ、大学の枠を超えて自分の学びたいことを学べる。女子大学で、京大や立命館大学の学生が学んでいる。あの先生のあの単位を取りたいということができる。同時に、お寺も神社も企業も福祉施設も含めていろんなことが学べる。哲学も宗教も学べる。まさに人間の生き方から学べるというまちの魅力を大学に生かしていきたい。

(松本総長)

京都は、大学が非常にたくさんあって、市民の1割が学生、そういう町は他にありません。サイズが比較的コンパクトで立派な町です。東京では、東大の総長と知事と産業界のトップが集まるこのような会は、ほとんどないんですね。大きすぎてできないんです。京都は、幸いまちもきれいにされていますし、文化芸術のプロもたくさんおられますし、神社もあり、大学生も多く、産業界には非常にユニークで力強いリーダーもおられます。それが集まれるんですね。大変重要です。

その土壌はどこにあるかと京都大学を例にあげますと、いわゆる帝国大学として2番目にこの地に作られたんです。最初、帝国大学は1個しかなくて東京にあったんです。今の東京大学です。優秀な官僚を育てる目的で作られたのですが、官僚養成大学つまり東大を出て、明治政府から外国へいっぱい出されました。みんな帰ってきて異口同音に、「外国の大学では研究なるものを行っている。官僚養成だけではなく、研究大学を作る必要がある。」と言いました。日本の芸術文化・産業を興すため、あるいは富国強兵、当時の政策を強烈に推進するためには研究も必要と。それで第二の大学をどこに作ろうかという話になり、大阪に三高の前身があってそこにという話があったんですが、当時の京都議会在が大きな運動を起こして、当時の予算の3分の1くらいを投じて、今の百万遍の土地を提供するから京都に持ってきなさいとしていただいて、京大の前身・第三高等学校が京都にできたんです。ですから、市民は学問を大切だとずっと思ってきたんです。

そういう意味で2番目の大学なんですが、よく考えてみると、京都のまちには都が千年以上ありましたから、平安時代にすでに大学がありました。二条だったと思いますが、当時の貴族階級・官僚階級を育てるための組織で、大学寮があって、学長や大学頭（だいがくのかみ）がいました。教授は博士と言われていました。その伝統が、室町の五山文学、江戸時代と脈々とつながりつながられて大学のまち・京都ができた。京都は大学のまちだとおっしゃっていただくのは、歴史に基づいていると私は理解しています。

(堀場会長)

いいお話を聞きましたね。市長は教育委員会で大変な活躍をされ、京都が非常に素晴らしい教育をしているということで、文科省もさることながら経産省の人が非常に高く評価し、勉強したいとたく

さん来られています。やはり活力の根源は、単に知識を学ばすのではなく教育であり、「エデュケーション」とは、教え授けるといよりは、個々の人間の能力を引き出していくということに原点があると思うんです。現に西京高校は、そういう思想と新しいアイデアで中高一貫教育をされて、実際に卒業生が各界でも活躍しています。市長から教育問題をお話しいただきたい。

(門川市長)

今、日本は閉塞感が満ちて混迷していますが、日本社会の最大の「成長戦略」というと教育・学問・科学技術・哲学も含めて、人を育てる以外にないわけです。「事業仕分け」等で研究予算が削られようとしたり、国の政策の行方が気になりますが、大学・初等中等教育を含めてしっかりと子どもが育つ、次の世代を担う人間が育つ京都でなければならない。そのためには、教育の目標を大学進学におかないで、「せめて30才ぐらいのときに何をしているか。どのように命を輝かして社会に貢献できているか。」ということイメージしながら学ぶという教育をしていかなければならない。しかし、綺麗事だけを言って京都の公立高校から大学進学できないということではいけないので、「二兎を追う」。人間性、道徳性もしっかり身につけて、スポーツや奉仕活動も重視し、同時にしっかりと学力も身につける。そうした実践が市立学校で一定の結果を出してきたと思ってます。

今、市立西京の中高一貫校の例を出していただきましたけれど、西京高校は素晴らしい商業高校でした。ただ、ほとんどの銀行や商社等が、高卒の人を採用しない。それで商業高校でありながら半分以上が大学などに進学する実態でした。この西京高校をどう改革していくかということをやたらやたら議論をした。そのときに、西京高校の教師たちと教育委員会のスタッフが、堀場製作所をいろいろ見せてもらい、堀場会長から話を聞いた。そのときにおっしゃったのは、「西京高校には歴史と伝統がある。日本で最初にできた商業高校の1つである。その歴史と伝統をどう生かすかを考えるのもいい。しかし、未来から何を求められているかを発想して、どうあるべきかを考えろ。」と。言われてみんなの頭が切り替わったんです。歴史と伝統も大切だけど、「次の時代はどういう時代であるか。どういう時代を作るのか。どんな人間を育てるべきか。」を考えてやってきた。「未来創造学科」の創設です。これが、功を奏してきているんだと思ってます。これから、「京都で子どもを育てたい。京都で子育てしてよかった。」あるいは「京都で子育てしよう。」と思われる京都のまちにしていく。大学も含めてこの可能性は京都に大いにありますから、頑張りたいと思います。

その前に若い人が結婚されないんですね。結婚されない、子どもが産まれないということで、何とかしないといけないということで、今、岡崎で京都市主催の「婚活」をやっているんです。男女各100人の定員で募集しました。応募者が集まるかなと思ったら、男368人、女性1140人。申し訳ないですが、抽選で100人と100人にして、先ほど挨拶だけしてここに飛んできて、このあとまた行きます。

(堀場会長)

抽選で100人にしたんですか？もったいない。

(門川市長)

もったいないです。それで第2弾、第3弾やらないといけないんですが、結婚しようと考えてられないのかと思ったら、出会いの場を求めてこれだけの人が応募されます。近所のおっちゃん、おばちゃんらがもっともっと若い人の結婚のお世話してくださいな。そして、生まれた子どもをしっかりと

育てる。子育ても応援する。

（堀場会長）

総長にお聞きしたいんですが、大学の一番のベースになるのは、高校を卒業して4年あるいは2年のマスター、3年のドクターと「教育」することと、いわゆる研究者が学問を究めるという「研究」という2つの役割を持っていますよね。そのときのジェネレーションというと、一般的には60才くらいまでが教育の限界ですよ。私みたいに80いくつになった高齢者は、全然頭がないんですか。

（松本総長）

昔ですと、高校卒業生が入ってきて、4年間大学生活を送って、多くは企業に就職して働くというのがパターンだったんですね。したがって、社会に出た人たちが自分をもう一度磨き直す必要がなくて、会社の中で定年になったらあとは余生というパターンだったんです。堀場さんが御指摘のとおり、日本人の平均余命がのびて85歳くらいまで皆さんお元気になりますと、60歳過ぎてから20年・25年ありますので、勉強したいという人も随分おられますし、新しい道に進みたい方もおられるんですね。そのときに、自分の持っているものだけでいける人もいますし、足りないから少し勉強し直してみようかという人もいます。あるいは、余裕ができたから、昔勉強したかったことをもう一度勉強してみたい方もおられると思うんですね。そういう受け口を大学がどれだけ用意できるか。京都は非常にたくさんの大学がありますから、大学コンソーシアム全体で受けとめることができます。もちろん京大でも考えておりますが、もっと基本的なことは、超高齢化社会になったときに社会はどうあるべきかという大枠を考えようとしています。その中で、そういう方を受け入れるということもありますし、社会に対して、京都市あるいは地方自治体、政府に対して、こういう施策を打ち出すべきではないかということ、社会科学、文学、哲学、理工学、医学、あらゆる分野の研究者たちが知恵を出し合って提言することも、社会に教育のサイクルを作る上で重要だろうと思っています。

（堀場会長）

これから少子高齢化時代が来ることは間違いないですが、年寄りというネガティブな感じが先に出るんです。介護保険とかそういうことばかりの話が出て。けれど実際に見たら、年寄りでも介護保険もらってという人より元気な老人が多いんです。

それで、「ひつまぶし人生」をこないだから考えているんです。「ひつまぶし」というのは、ご飯の上に鰻がのっていて、最初は鰻を食べて一杯、それから鰻をご飯の中にまぜて、鰻とご飯と一緒に食べ、最後は、そこにわさびをのせてお茶をかけて、茶漬けにするんです。そうすると、材料は鰻とご飯しかないのに、3度味わえるですよ。これを人生でしたら、20～50歳くらいまではある会社に勤めるとか、何か仕事をする。50～60歳後半、70歳くらいまでは、また別の仕事をする。また、死ぬまで違うことをする。そうすると同じ人間なのに3回違う人生を送れるということは、3倍得した気がするんです。私は現にそれをやったんです。50歳で社長をやめて会長になって、会社の仕事はせずに中小企業とかベンチャーの支援、それが済んだら国全体の情報の問題や産学連携の仕事をしてと。50歳くらいから次の人生を送るのに、その人の持っているものにプラスアルファとなる何かを教育して新しい人生を送る。また65歳くらいになったら、それにちょっとプラスアルファしてまた違う人生を送る。こういうふうに、常に人間というのは外から刺激を受けていると、そう簡単にアルツハイマーにならないんですよ。お寿司ばかり食べて一生終わる人は、お寿司もいいけどそれしか

わからない。お寿司食べて、次にてんぷらを食べて、最後にすき焼きを食べたら、同じ人生でも3度おいしいものが食べられる。そういうのに教育というのは必ずシンクロナイズドすると思うんです。まちのシステムもシンクロナイズドさせるというわけにはいかないのでしょうか。

(松本総長)

二つのことを申し上げたいんですが、一つは、若いときにしっかり勉強しておいてほしい。「まじめさ」は、今の若い子にはファッションブルではないんです。派手なことをやるのも重要ですけど、もっと重要なのはまじめなことなんです。小さいときからやるべきことをやって、どんな勉強でも嫌がらずに一応の知識を身につけて、木で言うと根を作っておくことが一番重要です。大学生でいろいろな勉強をして、社会に出てから新しいものを吸収しようというときに、基礎がないとなかなかできないので、若い子にはそういうことをお願いしたい。

二点目は、教育界が、大学も市も含めて、シニアの人に対して何もしてないわけではないんです。例えば、京大ですと「春秋講座」を作っています。たくさんの年配の方々が研究の最先端を聞きにみえています。残念なことは、来られる方の顔ぶれが覚えられるほどいつも同じなんです。質問される方も同じような方がされるので、もっと多くの市民に来てほしいと思いながら、いろんな面白いテーマを提供しているんです。ただ、おっしゃるように教育のプログラムはできていません。シンポジウム形式でレギュラーにやっておりますが、年に2回とか3回しかありません。そういう意味では少し考えないといけないと思っております。

(門川市長)

そうですね。団塊の世代が定年を迎え、その中に、京都大学を含めて京都の大学で学ばれた人がたくさんおられるはず。そういう人が、時間が出来たから、もう一度学び直そうという人に、年間を通じて、京都大学などでいろんな講座をやらせようとか、また、今までのものを見るだけの観光ではなくて、団塊の世代の人が学び直しをするために、京都に来ていただくと京都ならではの観光振興にもなりますよね。団塊の世代の人に照準をあてながら、もう一度新しい人生を開拓していただくことに京都が役割を果たす。これは宗教も芸術も大学も産業も観光業界も含めて、やれることではないかと思うんです。

(松本総長)

京都は「大学のまち」と市長も知事もおっしゃってくださっていますが、私は「学びのまち」といったほうが良いんじゃないか、幅広いんじゃないかと思っています。もちろん、最先端の研究とか大学とか、専門家がたくさんいるような場所は確かにあります。しかし、もう少し幅を広げて、文化、芸術、いわゆる伝統文化の専門家が京都にはたくさんおられますよね。伝統的なお茶やお花はもちろんのこと、踊りもあれば、2000くらいの神社仏閣があります。そういう意味では、文化のあらゆるジャンルにプロがおられるんです。その中で市民や京都以外から来られた方が学ぶ。もちろんそこに大学もあると思います。そういう姿勢でやっていけば、京都のまちはますます魅力的になると思います。

(堀場会長)

若いときは、学んだものをベースに何かそこから生み出すということがあります。だいたい60歳

で定年すぎたら、芸術でも「趣味で学ぶ」となる。悪いとは言いませんし、生きがいと感じているけれど、「そこから生まれるものがないのは当然」と思われている。これは僕ら老人にとってものすごく癪にさわる。要するに、今まで持っている経験にプラスして勉強したものであって、そこになんらかを生んでいるわけです。それが後期高齢者とか言われて、使ってばかりで生産性がないと思われているけど、現に生産性のある人もいるし、そういう環境を作れば生産する能力のある人が、ものだけでなく新しい文化芸術も含めて生産するんです。逆に言うと、年寄りでも生産させる。そして、儲けて市民税も払うと考えるといけないんです。年寄りも浪費だけしていればいいというのでは困る。

(門川市長)

高齢者は、知識と経験の宝庫ですから、新たな価値を創造し、社会貢献をしっかりといただく。その一つとして税金も納めていただくことは、大いにありがたいことです。先ほど言われたように京都は「学びのまち」ですので、お寺も神社も芸術も大学も含めて、そういうことをやっていく仕組みを作らないといけないです。これも高齢者にやっていただくと非常に良いので、生涯学習で学ばれた方が次に教える側に立つ。教え教えられ、同時に学生を教えていただく。大学生が伝統産業やものづくりの現場に出て行くとすごい勉強になる。今までは大学が地域貢献と言っていたけど、同時に大学と学生が地域から学ぶ、京都の歴史や京都力から学ぶという仕組みを作っていく。そういうときはボランティアになりますが、どんどんと今日お集まりの方々、お忙しい方もおられますけれど貢献していただけるような仕組みを作っていきたい。

(堀場会長)

「ボランティア」というのが気に入らないんです。私が講演会行ったら、「講演料を払うの失礼ですけど」と言われるけど、失礼なことはない。何で年寄りなら講演料が安くなるねんと。別にお金がほしいと言うのではないんです。価値観の問題で、「年寄りもただで良い」というのはおかしい。

(松本総長)

定年制がある種の差別を生んでいると思います。外国では、年齢による差別はいけないという概念が定着しています。特に、西洋文化ではそうだろうと思います。仕事がしたい、したくないというのは個人が決めることであって、個人の能力で70歳でも80歳でも働く人はどんどん働いて収入も得て、社会貢献をするとなっているんです。ところが日本では、年齢がきたら、よく働く人でもそうでない人も一律にやめる。制度として定着していますが、このあたりを考えていくべきです。

京大の定年は63才で、その多くの先生方は名誉教授になります。名誉教授の紙を渡すと、悲しい顔をされる人がいるんです。なぜかと言うと、名誉教授になると、もとの教室に200m以内に近づいてはいけないという部局もあるからなんです。年長者が若い人に対してしかりつけたり、知ったかぶりをするとか、また、力がないのに長老社会の風をふかすことがたぶん昔はあったんでしょうね。そういうことがあるので、定年になってから現役の教授に対して、あれこれ言われるとかなわないということで200m以内に近づかないでくれという話になっていた。しかし最近は、そういうことは言わないでおきましょうと言っています。財源とかいろいろな問題があるんですが、私個人としては、定年は社会全体で緩和して行って、高齢者が生き生き働けて、収入もあるという道にするというのがやはり良いと思います。

(堀場会長)

総長が人事権を持ったらできますよね。しかし、優秀な人なら高齢になってもおいておくという人事権は総長にはないわけでしょう？

(松本総長)

もちろん実質的にはそんなことは歴代の総長もやったこともありませんし、私も急にそうしようとも思っていないんですが、大学法人法が改正になって、学長は法律上そういう権限を持つことになっているんです。ただ、わからない人のことに口出しをしてどうこうできませんから、段階をおいて、学部なら学部の先生、研究科の先生の長に評価していただいて、最終決断をするというようなことを少しずつやっていくのが良いかなと思っています。なかなか難しいですが。

(堀場会長)

それなら200m以内どころか1000mも近づかないように、仕事を変えたら良いんですよ。名誉教授だからなにも大学のことをしないで、そういう人を企業もどんどん雇って。

(門川市長)

今始めようとしているのが、企業で退職された方に中小・零細企業の指導に行ってもらう仕組みを作ろうとしていまして、補正予算が通りました。大学の方でも指導に行っていただく仕組みができれば良いと思います。それから、なかなか文科省が認可しないんですけど、京大や定年退職された先生方が、まちづくり大学院を作ろうということで取り組まれていて、まずは来年4月から「大学校」として開講します。そういう素晴らしい人材がたくさんおられるんです。昔の65歳と今の65歳とは全然違いますし、そういう人が新しい活躍できる場を大学院として認められるよう取組をしているわけです。先ほどボランティアと言いましたけど、もちろんNPOなども立ち上げてもらって、それがシステムとして価値を生んで、収入にもなり、持続する。こういう仕組みも自然にでき、社会貢献になる京都でありたいですね。

(松本総長)

最近、NPOで活躍している大学の卒業生や名誉教授が随分おられます。NPOはただで奉仕のように聞こえますが、そうではなくて収入はちゃんとあります。余分な利潤がないということですので、働く場所は作れるんですね。市民の方でもNPO活動されている方は多いと思いますけど、そういうことを高齢者や若年と言わずに、年齢制限による差別をなくすという方向で考えていただければ良いと思っています。

◆会場からの質問と返答

(一般男性)

お三名方の生きてこられた青春時代を今の若者たちがどれだけ教訓にできるかが問われている。学生と少し話したら、歴史を全然知らないんです。国も日本人も究極の目的は、生き残るというサバイバルなんです。若者が成人式でペットボトルを投げ込んで、知事が怒っているのを目にする。挑戦者魂、先駆者魂、改革者魂の3つを植え付けることが教育の主眼だと思いますが、いかがでしょうか。

(門川市長)

おっしゃることはよくわかりますし、本当に背骨のある人間を育てていかないといけない。ただ、京都市の成人式に来てください。いかに整然としているか。冒頭、全員起立で国歌斉唱から始まり、4千人近くが整然としたものであります。青年の代表の決意は、涙が出そうになるくらい立派です。一部のマスコミが放送する荒れる成人式だけを見て、今の若者を決めつけないでいただきたい。多くの若者はまじめです。スケールが大きいかどうかはわからないけれど、それぞれ若い人も頑張っている。いいところを評価しながら、きっちりと一人ひとりを見て、足りないところを激励して伸ばしていく。こんな京都でありたいと思っています。

(大学生1)

京都で育つ子ども、幼稚園・小・中・高校と大学との距離をすごく感じます。せつくなのでもっと密接に連携していただくと京都の発展によりつなぐと感じました。

(大学生2)

定年で線引きするのでなく、高齢の方々が生き生きと活躍していく場というのに、個人的に共感を覚えて、そういう国、世界像が今後必要なのかと思っています。そうなったときに、今の日本の全体的な規模、事業を見ていると、下の世代の人たちの活躍が息苦しくなってくるので、全体的な事業規模の拡大が必要と思いますが、どうようにお考えかお聞かせください。

(堀場会長)

そうなるはいけないので、「ひつまぶし」と言ったのです。私も堀場製作所をずっとやってきて、最高顧問という名前もついているけど、つけてあるだけで会社のことは一切関係していない。言っても聞かない。何十年間もやってきたから、まどろっこしいことはいっぱいあるけど、それを言い出したらきりがないわけです。若い人が育たないから、その人の培った能力を全然違う職場・組織で発揮することによって、下から上がってくる人に影響を与えないようにする組織を作ろう、それが当然の世の中になったらいいということです。京都では「シルバーベンチャー」という、企業を卒業した人で集まりを作っています。例えば、中小企業では海外で活躍した人がいないためにオファーがきても処理できないけれど、長年大企業で海外で活躍し、定年した人を雇えば、いくらでも海外との交渉ができるわけです。しかも、今までは数十万円の月給を取っていた人が、厚生年金などがありますから、15～20万円くらいの給料で能力ある仕事をしてくれます。そうすると中小企業も嬉しいし、本人も家の草むしりではなしに、自分の能力を発揮することによって企業に喜んでもらえる。年寄りの人が、違った会社や組織だとすごく許容できるわけですね。それが当然のようなシステムができたらいいなということです。

(松本総長)

前に質問された方が、最近の若い子が昔の倫理観、哲学とか人生観を持っていないとおっしゃいました。日本は戦争を体験して、アメリカの民主主義という新しい制度が入ってきて、西洋化が進みました。そのために、昔のいいものまで捨ててしまったというところは、大いにあると私も思っております。ですから、これから戻せる部分、戻さなければならない部分を選択して、いいところを取っていくべきだと私自身も思っています。それから、サバイバルも必要だとおっしゃいましたが、世の中全体が豊かになりましたから、日本では特に豊かボケになっていて、世界に目を向けるとそのことが

わかります。日本のGDPは2位から3位に転落し、教育投資は20位くらいでOECD先進諸国で最下位です。市長の言葉もありましたけど、国全体が人材育成に投資しない国になってしまっているの、それもいけない。何より若いお母さんが、子どもを産む数が減りましたから、子どもをちやほやしすぎです。小学校の先生が、団体競技で子どもたちが勝つと、「よくうちの子どもたちはがんばってくれました」と言われますね。大きな間違いだと思います。「よくがんばりました」と言うべきで「よくがんばってくれました」というそんな表現はだめです。子どもは教育をされる立場ですから、きちんと教育者側は責任を持つべきだと思います。

それから、「年寄りが元気なのは結構だけど若い人の仕事がなくなってどうするのか」という話でしたけど、その年齢で心配するのは当然だろうと思いますが、同時に仕事とか活動度というのは自分たちの手で作らないといけません。先輩のやってきたことをまねすることは易しいですが、これほどつまらないものはありません。私は大学にいて、退屈で仕方がありませんでした。大学から出たいとずっと思い、なかなか果たせませんでした。回りの先生とは全部違うことをやってきたつもりです。小さな世界でもそういうことができます。世の中に出れば随分あるわけで、最近の若い子は海外になかなか行きませんが、目を向ければ仕事はいくらでもあります。ですから、若い人は既存のルールの上を走るだけでなく、ルール以外の原っぱに出て、自分で仕事を作るというふうにぜひしてほしいと思っています。そうしますと単に年長の人、先輩、そして自分、後輩という縦の系列だけで考えなくて済むと思いますので、ぜひ頑張ってください。

◆まとめ

(門川市長)

改めて京都というのは、大きな魅力のある都市だなあ、世界にこれだけの都市はないなあと思いました。同時に、大学のまち、宗教・芸術のまち、あらゆる京都の持つまちの強みを生かして、いつまでも学び続けられる仕組みを作る必要があると思います。話は変わりますが、子どもに百人一首を一所懸命教えている先生の話で印象的であったのが、百人一首を身につける方法として、ゲームや試験もそれなりの効果があったけれど、一番子どものモチベーションが上がったのは、高学年の子どもが低学年の子どもに教えること。低学年の子どもから「ありがとう」と言ってもらったときに、にこにこし、また真剣に学ぼうとした。大人も同じだと思います。生涯学習で学んだことをどんどん社会貢献に活かしてしていく。こういう仕組みができると、京都のまちがもっと強みを生かしながら元気になる。一人ひとりが輝き、まち全体が輝く。そして、学びのまちとしての価値が高まる。「京都で学ぼう。」と全国、世界の人がやって来て学ぶ。そんなまちを目指していきたいと思っています。宜しく願います。

(松本総長)

楽しい話を聞かせていただきましてありがとうございます。京都の魅力っていろいろありますが、プロの人がたくさんいることだと思うんです。世界で一流と言われる方々が随所におられます。ですから、尖ったところを目指して若い人が勉強する、つまり世界一になるという根性で頑張ることも京都にとっては大変重要なんですね。京都は、世界一と言っても、一個一個の要素に分解してそれぞれが頑張ってもらわないといけない。京大も頑張りますが、他の分野でもそうだと思いますね。これが一点です。これについては異論があるかもしれませんが、やはり京都はプロの人たち、いろんな芸術文化も含めてトップがおられます。そういうところを見ながら若い人が育ってほしいと思います。

2番目は、京都の人は非常に優しいし、外国人はまた来たいと言うんですけど、そこに住みますと少しネチネチした意地悪なところがありますよね。これはネットワークがはっきりできているという意味で良いのですが、そのネットワークを少し広げ、世界に目を向けることが必要です。京都の学びは、京都のネットワークとは切り離せないと思いますが、若い人にはもう少し視野を広げて、京都のことも考えながら、世界のことも常時見てほしいと思うんです。今だけではなくて、過去の世界も見る必要があると思います。そのためには、インターネットでいろいろな文献の検索もできますし、グーグルだったらあっという間に、本当かどうかは別として情報が入ってきます。それが正しいかどうかは考えてもらわないといけません。書物はインスタントのグーグル情報と違って、長い歴史の洗礼を受けていますから、本を読むということをしてほしいです。大学で若い人を採用するとき、「本を一日に何冊読みますか」とよく聞かれます。「1日ですか」と言うから「そうです1日に何冊読みますか」と。すると、じっと考えて「0.32冊です」とか「0.01冊です」とか言う人がいるんですよ。つまり10日とか1箇月に1冊しか読まないとか、1年に1冊しか読まないとか。そういうことではなくて、早く読む人もじっくり読む人もいますので、どんな読み方をしているかを答えながら何冊と言ってほしいんです。できれば1日に10冊は読んでほしいと思うんです。見るだけでもいい。京都に地盤を置きながらも、世界とか過去、あるいは自分が将来に作る未来に向けて、知識を豊かにしてもらって、行動してほしいと思っています。

(堀場会長)

最後に、皆さんにおみやげを差し上げたいと思います。人間がパニックになるのはどういうときか。2つあるんです。1つは、死にたくないのに殺されそうになるとき。戦争中は、敵の爆撃を受けたり、敵と小銃でドンパチをやりましたので、死にたくないけれども殺されそうになりました。もう1つは、今晚から食べるものがない。これは本当にパニックですよ。このお話のある会でしたら、「そのときは24時間のスーパーがなかったんですか」と言われたんです。家になくて、買いに行ったら店が閉まっているからないのとは違うんです。本当になんかいないんですよ。牛も豚も鳥もいないようになって、赤犬がおいしいと言うので赤犬はすぐなくなって、黒でも白でも良いと言ってそれも食べたんです。それで犬が京都のまちからいなくなって3箇月目に、日本は手を挙げたんです。犬がいる間は、日本は大丈夫です。犬がいなくなったなら3箇月目に、日本は手を挙げますから、犬のいる間は皆さん安心して生活していただけたらいいと思うんです。

どうも本日はありがとうございました。